
僕らの夢

SHIORI

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの夢

【Nコード】

N6528C

【作者名】

SHIORI

【あらすじ】

愛ってなんだよ？俺には愛なんていらない。愛を知らなかった不良少年が一人の少女と出会い、誰かを愛することの温かさを学んでいくLoveStory!!

ブローグ

誰かを愛したりとか
誰かに愛されたりだとか
そんなものどうでもいいって思ってた。

人はどうせ独り。
自分さえよければ
それでいい。
自分の幸せのために
誰かを裏切りながら
生きている。

愛なんてことばは
ただのきれいごと。
そう口になっている
自分自身が気持ちいいだけなんだ。
だからもう、
俺には愛なんていない。

VOL・1 俺。

俺、石田翔。 15歳。

雪の降るある寒い日、小さな予備校の前を通ると、せつかくの冬休みだというのに必死な顔した奴らが参考書片手に建物の中から出て来た。

多分奴らは中3で、数ヶ月後に控えた受験ってやつのために必死で勉強してるんだろう。

ほんとなら俺も中3で、今頃あいつらと同じように受験生やってるはずだった。だけど俺はもう、何年も前に制服を脱ぎ捨てた。

学校なんて行かない。センコーたちのオモテヅラだけのきれいごとであふれたつまらない学校には。

生徒たちがセンコーに幼稚な反抗かましてるくだらない学校には。

学校なんて何の意味があるんだろう。

勉強するため？

友達を作るため？

将来幸せになるため？

いや、そんなのは違う。

どうせ意味なんて最初からないんだから行かないほうがよっぽどマシだ。

だから俺は学校なんて行かない。

俺が学校に行かなくなった最初の頃、『心配』というタテマエのもとによくセンコーどもが家に来たり電話をしたりしてた。

中2の頃の女の担任なんかはよく飯を作りに来てくれたっけ。

ウザかったけど、実はほんの少しだけ嬉しかったりもした。

だけど最近ではそんなこと全くない。

中3になって担任が男に変わったからなのか、それともやっとあきらめてくれたのか。

まあ、俺にはどうでもいいことだけど。

ついでに言つとくが、俺には親がない。元ヤンだったという親父は俺がまだ幼かった頃にバイク事故で死んだ。

無理矢理な走り方をしていた大型トラックとぶつかったらしい。

それから飲み屋をやっていたお袋と二人きりで暮らしていたが、そのお袋もちょうど3年前のクリスマスに好きな人が出来たからとだけ言い残して家を出て行った。

それからというもの、俺はたった一人で生きている。情けない話だが、俺は捨てられたんだ。それはまるで小さな犬のように。

そのとき俺は分かった。

世の中に愛なんて存在しない。

俺は愛なんて信じない。

VOL・2 ダチ

朝10時。

俺は部屋のドアを誰かが激しくノックする音で目を覚ました。

昨日はバイク仲間、いや正確には暴走族連中との集会があつてやつと眠りについたのは朝になってからだからまだまだ眠い。

俺はほっとけばすぐに帰るだろうと思つてシカトして寝ていた。だがしばらく経つてもその音は止みそうもない。

それどころか次第に強くなっていく。

俺はあきらめて眠い目をこすりながら立ち上がり、扉を開けた。

「はいはい、何だよこんな時間に」

慌てた様子の奴がそこには立っていた。

乙幡晋也、俺の親友。

晋也とは幼稚園からの付き合いでお互いのことは何でも知っている。もちろんいなくなったお袋のことも。

真面目でちゃんと学校に行き、高校もレベルの高いところを狙ってる晋也と俺は全く正反対なはずなのだが、何故か昔から妙に気が合つた。

小学生のときにはよくいつしよにいたずらもして大人に怒られた。晋也の家はちゃんと両親がそろっているのだが親と上手くはいってないらしく、よく家出といつては俺の家に転がりこんでくる。

俺なんかから見れば贅沢な奴だ。

「なんだ、お前か」

「翔、助けてくれよ。大変なんだよ」

「どうした？」

晋也は相当パニックってるらしく俺の問いにすぐには答えられない。しょうがなく俺は晋也を家に入れ、紅茶を出してやった。

「ほら、飲めよ」

「ああ、悪い」

晋也はそれをゆっくりと飲んだ。

そしてやっと落ち着いたらしく、話し始めた。

「実は俺昨日、学校のガラス全部割ったんだ」

吹き出しそうになると同時に俺の中で尾崎豊の『卒業』が流れた。

「は？　なんで？」

「模試の結果やばくて、むしゃくしゃしててつい」

「ついってお前……。だからって何、十年以上も前のことやってんだよ。オザキかよ」

「ごめん」

「まあ、いいけどさ」

晋也が泣き出しそうな顔で俺を見た。

「なあ、翔。俺、どうすればいい？このままじゃ受験やべえよ」

俺と晋也は違う。

こいつには受験という名の敵が待ち構えている。

こんなことで自分の将来を犠牲にするわけにはいかないんだ。

「分かった、分かった。俺がやったことにすればいいからさ、お前は何も心配すんな。大丈夫だから」

「でも・・・」

「大丈夫だって」

「だけど俺、お前に申し訳ねえよ」

俺は微笑んでゆっくりと言った。

「気にすんな、俺はどうせ高校受けないからさ。俺んち親もいないから、進学なんて無理なんだよ。だからお前は俺の分も高校生活楽しめ。分かったな」

晋也は泣きそうな顔でうなずいた。

「ほら、塾あるんだろ。早く行けよ」

俺がそう言つと晋也は何度も何度もお礼を言いながら帰って行った。

それにしてもよくこんな嘘がつけたもんだ。

高校なんて楽しいわけもないのに。

VOL・3 聖夜に舞い降りた天使

俺は晋也が帰ったのを確かめると、もう一度寝ようと布団に戻った。だがなかなか寝付けない。なんでだろう。

体は眠りたいはずなのに脳みそがそれを許さない。

ガキみたいに羊の数を数えてみても、

音楽をかけてみても、

俺が眠りに落ちることはなかった。

寝るのをあきらめて俺は起き上がり、朝飯のカップラーメンを用意することにした。

やかんでお湯をわかしながら不意に壁にかけられたカレンダーを見ると、あることに気がついた。

今日は12月24日。

クリスマスイブ。

なんだか不意に昔の記憶が蘇ってきた。

そわそわしながらお袋の帰りを待っているガキの頃の俺。

時計は12時をとくに過ぎている。

しばらく待って、サンタの恰好をしたお袋が大きなケーキとプレゼントを持って帰ってくる。

ささやかだけど俺もお袋も幸せそうに笑ってた。

何故だか知らないが不意に涙がこぼれた。

あんな奴、もうお袋なんかじゃないって思ってたはずなのに。

もう二度と思い出したくなんてなかったはずなのに。なんでだろう・
・。

なんであんな奴のこと、思い出しちゃったんだろう。

不意に部屋のドアを叩く音がした。

多分晋也が忘れ物でも取りに来たんだろう。

すぐに分かった。

だってこの家に誰かが訪ねてくるなんてこと、滅多にないから。

「はい」

俺は涙をタオルで乱暴に拭き、扉を開けた。

相手の顔を見て俺は立ち止まった。

聖夜に舞い降りた天使。

そんなものを見たような気がした。

「あ、あのー」

ぼーっとしていた俺に少女がおそろおそろ言った。

「ここ、石田さんのお宅ですよね？」

俺は我に返り、わざとぶっきらぼうに言った。

この少女に俺の心の動揺を見破られたくはなかった。他人に自分の弱さを見せてはいけない。

悲しいが、それが俺の不良人生で身につけた生きる術だった。

「ああ、そうだけど」

「よかった。私、中学で翔くんといっしょのクラスの西原小雪とい
います」なんだ、学校の同級生が。

そう思った瞬間に

さっきまでのときめきは

どこかへ消え失せた。

「あの、翔くんは？」

「俺だけど」

そう言つと少女はびっくりしていた。

まさか俺みたいなのが『石田翔』だとは思ってもいなかったんだろ
う。

じゃなきゃこんな真面目そうな少女が訪ねてくるはずがない。

「あのね、私、実は石田くんのクラスで学級委員長やって。それで大事な話があって来たの。ほんの少しでいいんだけど時間大丈夫かな？」

何だよ、話って。

めんどくさい。

別に聞かなきゃいけない理由なんてどこにもない気がしたが、だからと言って聞かない理由もどこにもなかった。

「別にいいよ。こんなところでもなんだし上がる？」

少女は少しためらっているようだった。

誰だってそうだろう。

会ったばかりの俺みたいな奴にそう言われてすんなり家に上がるよ
うな奴はまずいないだろう。

俺が少女の立場でも上がらない。

だが少女は何を思ったのか小さくうなずいた。

俺は乱雑に散らかった部屋を少し片付けて少女の座るスペースを作り、

もう何年も干していない薄汚れた座布団を置いて座らせた。

そしてさっき沸かしたお湯で紅茶を入れてやった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

少女はそう言って紅茶を一口すすった。

「えっと、確か西原さんだっけ？ 話って何？」

「あのね、実はクラスでもみんなで1回話し合ったんだけど、もうすぐ私たち卒業でしょ？ そしたらみんなバラバラになって会えなくなるわけだし、残された時間を思い出作りに使いたい。それで石田くんも私たちのクラスのメンバーなわけだし、よかったら3学期学校出て来てくれないかなって思ってる・・・」

要するにみんな青春ごっこしたいのか。
俺も巻き込んで。

「せっかく来てくれたとこ悪いけど、俺は学校なんか行く気ちっともないから」

出来るだけことを大きくしないように、
出来るだけ面倒なことにならないように、
俺は慎重に言葉を選んでいた。

「だけど・・・」

女ってどうしてこんなにもめんどくさいんだろう。
俺の努力も虚しく少女は
目をうるうるさせている。

「じゅめんね」

何謝ってたんだ、俺。

「・・・・・・・・」

「ほら、その紅茶飲んだらさ、すぐ帰りなよ。俺なんかにために時間割いてる暇なんてないんだろ？」

少女は何も喋らない。

俺もどうしたらいいのかわからなくて言葉が見つけれなかった。
2人の間にしばらくの間重苦しい沈黙が流れた。

しばらくして少女が不意に口を開いた。

「ねえ、石田くん」

「ん？」

「いつもカップラーメン食べてるの？」

「え・・・・・・・・」

どうしてそれをこいつが知っているんだ？

そしてはっとした。

ここから見える台所のゴミ袋の中には大量のカップラーメンの空き容器が捨ててある。

「そんなものばかり食べてたんじゃ体によくないよ。ちゃんと栄養のあるもの食べなくちゃ」

大きなお世話。

そんなこと、お前には何の関係もないだろ。

どうせ他人のことなんだから。

「私、将来栄養士目指してるんだ。今も少しだけ勉強してるの。石田くんはどうでもいいって思うかもしれないけど、栄養ってすごく大切なんだよ」

栄養なんて俺にはいらねえんだよ。

「だからさ、お母さんに栄養のあるもの作っ・・・」

その言葉を聞いた瞬間、俺はキレていた。

「さっきから何なんだよ、お前。いきなり来て俺に説教か？ どうせお前もセンコーに頼まれて来ただけなんだろ？ もういいから帰れよ、任務は完了したんだろ」

そいつは目を丸くして俺を見ていた。

俺はそいつの腕を乱暴に掴み、無理矢理外に追い出した。

別に栄養がどうとかって話にキレたわけじゃない。

俺の家のことなんて何も知らないくせに、

お袋の名前を何の悪意もなく出したからムカついたんだ。

VOL・5 俺とあいつとオムライス。

その後俺はむさぼるようにただひたすらに寝た。
出来ることなら全てを忘れてしまいたかった。
お袋のことも、そしてあの女のこと。

夕方。

俺はふと目を覚ました。

起きたばかりでまだぼーっとする頭のままベランダに出ると、空が
オレンジに夕焼けしていてすごくきれいだった。

俺は小さい頃から空が好きだった。

晴れ渡った青い空、

オレンジの夕焼け空・・・。

きれいな海と空が重なり、そこに水平線が見えたならサイコーだ。
つらいときはいつも空を見ていた。

悲しいときはいつも空に励まされていた。

どうして俺は落ち込んだとき空を見てしまっただろうか。

もしかしてそれは俺がまだ頑張れるからなのかな。

しばらく空を眺めていると不意にドアをノックする音が聞こえた。

そつえば晋也が来るかもとか言ってたっけ。

たまにはゲーセンでも行こうかな。

「晋也、開いてるから入ってこいよ」
だがなかなかドアは開かない。

「晋也？」

俺はドアを開けた。

するとそこにいたのは晋也ではなく、あの女だった。西原小雪とかいう、あのお説教女。

「お前………」

言葉を失う俺の前に奴はスーパーの袋を掲げた。

「夕飯、作ってあげようかと思って」

「は？」

「大丈夫、自慢じゃないけど料理は上手い方だから」

「ちよつと待てよ」

「いいから、いいから」

制止する俺を押し切って家の中に上がり込み、奴は台所で何かを作り始めた。

俺はもうあきれて何も言えず、ただ奴の様子を伺っていた。

「もう、汚いなあ。台所は食べ物を扱うんだからきれいにしなきゃ」

もう何年も掃除してない埃まみれの台所にそう文句を言っている。

こいつ、大人しく見えるが実は………？

しばらく経って奴はオムライスを作りあげた。
俺の分と自分の分を皿に盛り付け、差し出した。

「はい、どうぞ」

「いらねえよ」

「せっかく作ったのに」

そう言いながらも奴は自分の分を一口食べた。

「……ん？ 美味しい」
自分で作ったくせに。

「ほら、石田くんも食べなよ」

「だからいらねえって」

すると奴は泣きそうな目で俺を見てきた。
これだから女ってやつは。

「はいはい、分かりました。食べばいいんだろ、食べば」

俺はオムライスを一口食べた。

「……ん？
なんだ、これは。
美味しい!!」

俺は気がついたら夢中で食べていた。
奴はそんな俺を嬉しそうに見ている。

どうしてだろう。

久しぶりに何かを食いたいと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6528c/>

僕らの夢

2011年1月27日12時00分発行